

2020 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

想像する未来

(原文)

武藤 佑奈 (15 歳)

東京都

晃華学園中学校

「人間が想像できることは、人間が必ず実現できる」 ジュエール・ヴェルヌ

2020 年の私へ

元気ですか？ 笑っていますか？ 自分の夢に向かって進んでいますか？

2030 年の私は、10 年前以上に笑っています。2030 年は一言でいえば優しさでいっぱい、私も含めて世界のどの人を見ても笑顔で溢れかえっています。

10 年前の世界はコロナウイルスという未知なる存在によって人々から笑顔が消えていたよね。今まで道に捨てられた一枚のマスクでも貴重に感じていた。その一枚のマスクで笑顔になれたし、身を守った。けど、一日一日過ぎていくうちに、たかが一枚のマスクでもないだけで人々は恐怖になり、世の中にいられなくなった。そんな時に誤嚥性肺炎で亡くなった祖父はコロナの検査をしなければならず、そのせいで亡くなるまで会いに行けなかったし、亡くなった時でも触れられなかった。マスクをして、手袋をたくさん重ねた。私が自分自身の手で触れられた時には、もうそこにいたのは祖父じゃなく知らない人だった。私は、そのコロナウイルスという未知なる存在が憎く、恐怖を感じた。こんな思いを他にも沢山の人がしていると思うと悲しかった。私たちは、そういう状態になり、外と壁が出来た時にやっと普通に生活するということの重要性を身にしみて感じた。

でも今は違うよ。そんなものに勝った。だんだん自分たちに考える時が増え、このままじゃいけないって誰かに任せっきりじゃいけないって気づいたから、協力してどうにか普通に生きていけるように苦しむ人が出てこないように自分でできることは自分で行き、周りの人にも手を差し伸べる事を始めた。世界が一つになることを想像し、世界のいろんなところで考えられていた。そうなったこの世界は優しさに包まれ、とても住みやすい世の中で、助け合うってことは当たり前になった。私たちは今、地球の歴史を学んで、いいところは取り入れて過ごしている。子供にも発言権があるし、大人も耳を傾けてくれている。すべての人の意見を入れて話を重ね、公平な世の中を目指した。そのおかげでみんなが自分たちの肌の色や言葉が違う、お金がある・ないで差別する必要がないことに気が付いた。自分の夢、やりたいことが見つからなかった私はそんな時にふと苦しんでる人を助けたいと思った。何をすればいいかわからなかったから、まず目の前にあることを一つずつやりとげ、周りの人に

やさしく生きることを掲げてやってみた。最初は自分に余裕がなかったりして難しかったけど自分には自信があったから、乗り越えられた。あの、未知なるものに戦って勝ったことを。それはどの国の人も持っていたものだったから、どんなものでも乗り越えられた。何かにおびえて苦しんでいる人は10年前には夢みたいなこの世界にもやっぱりいる。けど、10年前と確実に違うのはその人たちが笑顔になること。誰かが誰かを支えているから、絶対最後には笑ってる事。孤独に感じる人は一人もない。そして、10年前にも今でも私たちに色んな知恵を教えてくれるものは沢山あるが、それが本当に正しいのか2030年の私たちは歴史を学んだから、世界の人と交流があるから、見分けることができるようになった。

10年前の私は色んなことに悩んでいたし、迷っていると思う。でも、そんな時に考えていたこんな世の中になったらいいなと思っていた未来が10年後には来るよ。そして、私の中の一人だ。これからの未来をつくる私たちが変わればどんな未来でも作れる。いいことも悪いことも全てを含めて。このことを心にとめてこれから生きて行ってほしい。これができれば、絶対、世界中どこを見ても笑っている10年前の私が描いた世界が広がっているから。きっと。そんな未来が来ることを願っている。

私たちが創造できることは、どんなに無謀でも、どんなに困難でも実現できるってことを絶対覚えたいほしい。

2030年の未来の私より